

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	杜 曉磊
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
日本語・中国語における疑問文・文末終助詞の対照研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	吉田	光演
審査委員	教 授	荒見	泰史
審査委員	教 授	岩崎	克己
審査委員	准教授	町田	章
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は日本語と中国語における疑問文と文末終助詞「か」と“吗”について比較対照することを目的とする。本論文は5章から構成され、内容は以下の通りである。</p> <p>第1章は本論文の研究方法・理論的背景・研究対象について述べ、第2章では日本語と中国語の多重 WH 疑問文と Yes/No 疑問文の統語論的・意味論的な比較を行った。多重 WH 疑問文はペアリスト解釈を持ち、意味論的には優位基準に基づく指示関数を表すが、「なぜ」／“为什么(なぜ)”は優位基準とはなり得ず、狭いスコープしか持たないこと、統語論的には日本語の名詞句的な WH 疑問詞と中国語の名詞的な WH 疑問詞の疑問演算子の基底生成位置が異なるため、両者を含む多重 WH 疑問文において統語的な相違が生じることを明らかにした。</p> <p>第3章では、文末終助詞「か」と“吗”の語用論的機能と両者の歴史的変化過程を比較した。日本語の「か」は Yes/No 疑問・WH 疑問・独り言・感嘆文・三人称小説地の文に現れ、行為指示型・表出型・断定型の発話内行為と結びつくが、“吗”は行為指示型の Yes/No 疑問文にしか現れない。歴史的には、日本語終助詞「か」が WH 疑問・Yes/No 疑問・感嘆などと関連する古文の係り結びの「か」から派生したことが、他方、中国語古文では係り結びが存在せず、WH 疑問文と Yes/No 疑問文が統語的に異なることを先行研究とコーパスの検討を通じて示した。中国語古文では WH 疑問詞の統語的移動が存在したが、その後移動は消失し、他方、“吗”は「VP-“無”」から生じ、Yes/No 疑問文の終助詞“吗”となった。従って、“吗”は Yes/No 疑問文の文末のみに使用され、聞き手目当ての疑問を表し、情報提供の依頼機能を果たすが、日本語「か」の多様な用法とは異なることを明らかにした。</p> <p>第4章では、生成文法と形式意味論を用いて疑問文・感嘆文に現れる「か」と“吗”を比較した。疑問文の「か」と“吗”は疑問を示す ForceP の主要部であり、話し手・聞き手を考慮すると SAP (Speech Act Phrase) の主要部であることは既に論じられているが、さらに Tenny (2006), Hashimoto (2015) などに基づき、「報告」と「語り」の相違を組み込み、「報告」文の「か」、感嘆文の「か」を区別し、そこに一種の人称制限が働くことを指摘し、それらのモダリティに関する判断者を設定した。さらに、疑問の「か」と“吗”は可能な命題の集合から適切な答えを選び出す選言を意味するという先行研究を踏まえ、選言には非顕在的な「情報の提</p>			

供者」が存在し、疑問文においては情報の提供者と疑問モダリティの判断者は聞き手と一致するが、「か」を含む感嘆文においては情報の提供者と表出モダリティの判断者は話し手と一致し、焦点化された名詞句は話し手にとって予想外の値を取ると分析し、疑問と感嘆の「か」の統一的説明を行った。

第5章では本論文の結論と今後の展望について述べた。

本論文の意義は、日本語の「か」と中国語の“吗”について、生成文法理論を土台にして、形式意味論・発話行為理論を組み込み、統語論・意味論・語用論の観点から包括的に比較対照した点にある。さらに、従来研究が進んでいなかった感嘆の「か」に関して、疑問文・感嘆文に生じる「か」のモダリティに情報の提供者のパラメータを加えることによって、疑問のみならず、感嘆の「か」を含む日本語の「か」がすべて選言であるという統一的な説明を行ったことは高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。